野村生涯教育だより

No. 437

（公財）野村生涯教育センターの
シンボルマーク
［n］は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観＝Nature」の
頭文字を表している。

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

もくじ

● 創立 61 周年記念式
● グリーティングカード

石神井川　桜とヒヨドリ

創立六十一周年記念式

三月四日（土）、当センターは創立六十一周年を迎え、第二研修会館にて、渡利幸雄評議員出席の下、全国各支部・連絡所十九箇所をオンラインで繋ぎ、記念式を行った。

はじめに研修・地域担当の板井秀子さんが《本部挨拶》を述べた。

板井さんは「新型コロナ感染症発生から丸三年が過ぎ、世界中がこのウイルスとの共生を考えるようになりました。

地球温暖化の問題、ロシアによるウクライナへの侵攻は世界中を巻き込み、日本の防衛の在り方も大きく変わろうとしています。人類が命の危機に晒されている大変危険な時代に私たちはいます。

今年始めに、金子由美子理事長は『学びが形骸化している。私たちがその精神を失って形だけが残ったら、センターの存在意義はなくなる』とおっしゃいました。私は定例講座と全国の支部・連絡所の窓口となる研修・地域担当を拝命して四年目になります。本部の窓口として、支部の方々から上がってくることを受けるにも、一義は、〝自分を知る〟であるのに、やり方を覚える意識で膨大な事柄を決めることに終始し、地域の皆さんの話をよく聞いて、共に考えることができない自分を知りつつあります。

次年度は、まず、私から主体的に自分づくりをしていきたいと思います。本日は、創立六十一周年記念日、誠におめでとうございます」と述べた。

『公益財団法人 野村生涯教育センターのあゆみ』の上映に続き、《創立記念日を迎えて》と題して研修・地域担当の伊藤正子さんがお祝いの言葉を述べた。

伊藤さんは「創設者 野村佳子初代理事長は六十一年前、青少年の問題に胸を痛められ、教育の抜本的な問い直しからこの活動を始められました。

年頭に金子理事長は『創設者の慧眼と精神に触れた先輩方が、目に見えない精神の価値と自分の足もとでの実践から実証を得ていった草創期、人から人へと繋がり、センターはここまで広がってきました。先輩に関わってもらったように、今、後輩に関わっていますか？　そして自分にとってセンターは必要なのかを考えてみてください』と投げかけました。

私は子どもの問題から学びにつき、先輩から親である夫婦の関係が土壌になっているのだと教えてもらい、私自身が問題だったことに気づかせていただきました。そして、今の社会の危機的状況をつくってきたのは、私たち一人ひとりだと学びながらも、社会の諸問題を自己教育の課題にする意識がない自分を発見しました。

現在、私は研修・地域担当として支部・連絡所から上がってくる問題に対し、自分がどう感じ、どう関わったか、その自分の在り方から教育課題を見ていくのではなく、やることに終始し答えを求めるだけになっていたことに気づき、今回、本当に責任がとれていないことを自覚できました。人としてどう責任を取るかを、まず自分に課していきたいと思います」と語った。

地域の講座生からの発言の後、金子理事長が挨拶に立った。

「本日は創立六十一周年記念日、誠におめでとうございます。

昨年の六十周年を今朝も思い出し、コロナ禍の中で大変な思いになりながらも記念式を執り行ってから、もう一年が経ったのだなと改めて思いました。

新たな一歩を踏み出して、私はこの年頭に二代目の理事長として一から出直す思いであることをお話ししました。私自身の大改革が必要だと思ったのです。

センターが創立された一九六〇年代から現在まで、社会は有史以来の劇的な変化を経験し続け、その速度は加速しているように感じます。デジタル機器が象徴するように、生活のあらゆる側面で便利になり、私たちもそれを享受しています。しかし便利さゆえに何事も簡単にできる感覚でいる人間が多くなり、逆に人間の質が低下しているようにも感じています。

創設者は一九七三年発刊の機関紙に、教育とは何かについて『本来人間とは自ら進

んで文化を求める力を潜在的に持っています。だから、どんな条件にも制せられない自分、さらにはすべての悪条件と積極的に取り組んで可能性を生み出していく自分、それこそが自己啓発であり、真の教育のあり方であろうと思うのです。この筋金を通しておかないと、生涯教育とは単なる時間的な積み重ねに終わってしまいます』と述べています。

　果たして私たちは悪条件と向き合い、積極的に取り組んで可能性を生み出していく自分になっているのでしょうか。自分にそれを問うたとき、私たちは『できるか、できないか』ばかりに目を奪われ、人間としての質の向上に意識がいっていないように感じます。

　創設者や先輩の背中を見て学んだ『放っておけない』『やらなければ』という姿勢は、いつしか『できるか、できないか』のもの差しに取って代わり『言われたらやる』という自らが主体者になって価値を生み出していく意識などなくなってしまったかのようです。これが既成の教育観、つまり知識を覚え、答案に書き、良い成績を取るといった戦後教育の培った弊害とも言うべき意識なのか、この意識の根深さをまさに私たち自身に見る思いです。

　しかしそのような私たちでも縁あって野村生涯教育と出合い、大事な価値とは何かを学んできました。この時代の大きな環境変化の中で、日々の悪条件との出合いの中で、諸先輩に関わりをいただき、その悪条件と取り組み、自らの価値へ少なからず目覚めさせていただいてきたはずです。

　どれほど科学文明が進歩し便利になっても、生きることの難しさはいつの時代も変わらないことを環境が教えてくれていると思います。地球温暖化の問題。そして少子高齢化は足もとの問題のみならず社会保障制度、経済活動に深刻な影響を与えます。そして収束には至らないコロナウイルス。対立を深める国家間。どこまでも進む科学技術革新による新たな武器の開発。それに伴い日本の国の形が変わるような防衛問題も論議を尽くさぬままに決めていく政府。原発が六十年を越えても運転可能とする原則を変える方向にも同じように政府に対する疑問が募ります。

　こうした日本、こうした時代になったという結果を、私たちはどう捉え、どう変えていくのか。

　私たちはこの地球の極限の時代に生きています。そしてこの極限の時代に自らに内在する無限の可能性を開発すれば救いに繋がることを学んできています。

　だからこそ私たちは改めてどう学んできたのかを検証し、人間をつくる一番大事な価値を自らに育てるために筋金を通していく。つまり、出合う悪条件と積極的に取り組むことを通して、自らをつくることを厳しく見直していかなければなりません。

　改めて野村生涯教育の精神とは何かを見つめ直さなければならないと思います。

　この教育原理に則り自分をつくる。自らの人間の質を高めることを目的に未来に向かっていきたいと思います。

　本当に私たちは見える形ばかりに捉われ、見えない精神を育てることが疎かになっています。時代や環境の影響を受けながらも積み上げてきた軸に筋金が通っていたら、何が大事で、何が些末なことなのかが分かってきます。自分の中に埋蔵している、自分自身も知らない無限の可能性を引き出すことを願いに、創設者が最後の国際フォーラムでおっしゃった〝精神を繋ぐ〟その意味するところを心に深く留めて、六十二年目の出発をさせていただきたいと思います」と金子理事長は挨拶を締め括った。

グリーティングカード
国際ネットワークの皆さまへ

季節のご挨拶を申し上げます。

皆さまにおかれましてはお健やかに新春をお迎えのことと存じます。

昨年二月、二十一世紀に起こるとは想像もしなかった国連常任理事国による他国への侵攻は、世界を驚愕させました。

このことは第二次世界大戦後に確立されてきた平和を希求するはずの国際機関、また世界の様々な組織、一般の一人ひとりが、改めて本当にその目的に向かっているのか、何を大事にしなければならないかを、本気で立ち止まって考えなければならないことを提起されているように思います。

それぞれの国の抱えている問題は違えども、足もとの問題から地球規模の生態系破壊の問題まで、〝生きること〟がますます難しくなっている時代を私たちは生きています。

こうした現代の持つ課題に対し、改めて一人ひとりがこの時代において〝幸せとは何か〟を模索し、創設者が遺した「未来創造学としての生涯教育」を基盤に、人間としての尊厳に目覚めているのか、他者の尊厳を大事に思えているのかを、より深く検証し、多くの方々とその思いを共有してまいりたいと願っています。

私たちは共に地球を住処とする、運命を共有している人間同士ですから。

二〇二三年、皆さまにとって良き年になりますように願っております。

（公財）野村生涯教育センター
理事長　金子由美子

Season's Greetings

I wish you all a healthy and happy New Year.

Last February, the invasion of a country by a permanent member of the United Nations Security Council, as unimaginable as this happening in the 21st century, shocked the entire world.
It is my belief that the event prompted international authorities established after World War II for the purpose of seeking peace, as well as various organizations around the globe alongside every one of us, to stop and seriously think whether we had truly been heading toward this objective of ours, and what really is important to us today.

Although problems faced in each country are different, we are in an era in which “living” is becoming increasingly difficult, from dealing with domestic issues to battling the destruction of ecosystems on a global scale.
In response to these challenges of our time, each of us are tasked in searching for the meaning of happiness in this age. It is my hope that we continue to further our learnings and share our findings based on the “Lifelong Integrated Education as a Creator of the Future” bequeathed by our founder, on whether we are awakening to our dignity and respecting the dignity of others as human beings.

Because in the end, we are all human beings living together on this planet, and therefore whose fates are intertwined.

I hope that 2023 will be a wonderful year for all of us.

金子 由美子
Yumiko Kaneko
Director General,
Nomura Center for Lifelong Integrated Education

二〇二三年を迎えるにあたって、金子理事長より国連、ユネスコ、駐日の各国大使、世界各国のネットワークの方々に静岡・芝川からの富士山を配し「それぞれの国には継承したい素晴らしい遺産があります。美しい地球を残したいと思います」と一文を添えた季節の挨拶状（デジタル版）を送付した。

ほどなく各国大使はじめ、交流の深い方々から共感や願いをしたためたメッセージが届いた。

●ヒシャーム・バドル　（元駐日エジプト大使　エジプト経済開発省グリーン・スマート・プロジェクト・ナショナルイニシアチブ・ジェネラルマネージャー）

皆さまの素晴らしいご活動に私は常々期待しております。日本のみならず、あらゆる国々でこの世界における模範となるものと思っております。教育は一生涯に亘ることを啓蒙され、平和、愛、異文化間の交流、対話、調和の大切さを伝えるメッセージを世界中に伝えている。このことは常に私の心に留めています。私の母をはじめ、家族全員があなたのことを、こうした高潔な目的に向かって活動している組織の最高の模範として思っています。

●パトリシア・ミッシェ

（アメリカ・アンティオック大学名誉教授）

心に迫るようなメッセージをありがとうございます。この時代の悲しみと痛み、そしてこのような時に多くの人々が求める、いかにして幸福を得るかという問いかけを表してくれました。国連とその目的が安保理理事国の他国への侵略によって台無しになっている。この事態はまさに、国連をはじめ、第二次大戦後の平和・安全保障にとって大打撃であり、ここから我々人類がどこをめざすのか、今直面する危機に向き合い、いかに平和の枠組みを強めていくか、新たな構造を生み出すのかという問いを喚起しています。

●マグナス・ハーベルスラッド

（ノルウェー工科大学名誉教授）

私たちの願いを一つひとつ実現させ、そしてあらゆる国の為政者、専門家が平和のための政治を創造していくよう共に続けていきましょう。

●アルネ・カールセン

（前ユネスコ生涯学習研究所所長）

皆さまのより良い世界をめざす継続的なご活動に心強く励まされます。

●ジリアン・クライン

（イギリス・トレンハム出版社編集長）

この惑星のすべての人々へのあなたの心からの願いと、その美しさを表す写真をありがとう。私たちの世界に対するあなたの思い、私たちがお互いに繋がっているということに共感いたします。

●ズザナ・ラピトゥコヴァー

（スロバキア・キュレーター）

この戦いが世界にある唯一の武力紛争ではないことは皆わかっていますが、ロシアによるウクライナへの不当な侵攻によりヨーロッパは大変動揺しています。この事態は長年頼りにしてきた第二次大戦後の国際的な枠組みや多国間平和協定では私たちを守れないことを示しています。二十一世紀に有効な何かを私たちは見出す必要性に迫られていることに間違いありません。

●マリア・ツォンコバ

（当センターブルガリア支部責任者）

二〇二三年、私たちは皆あなたのおっしゃることをこれまで以上に必要としています。この惑星に住む人々が今日の経験を通して、これまでより賢く、強く、未来へ前進していけるように願っています。

ミッシェさんから届いたデジタルメッセージカードに、一九六〇年代、困難の時代に直面した人類に向けて書かれた詩と共に、進化の弧は光へ、希望、愛、平和へと向かっていることを私は今も信じております、と書き添えてあった。

（敬省略）